日本の都市大衆文化

鈴木 貞美
国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学名誉教授

1. 日本の都市大衆文化と、その特徴

冷戦後の今日、情報化と呼ばれる現象を加えながら、大量生産／大量宣伝／大量消費を指標とする都市大衆文化は、ますます世界にひろがりつつある。日本のそれは、1920年代に他の先進諸国とほぼ同時に形成されたが、独自の性格ももっている。ここでは、日本の都市大衆文化の概要と、その独自性を明らかにしてゆきたい。

日本では比較的早くから都市の文化が発達し、日本の中世には、首都として古くからの奈良、京都に鎌倉が加わり三大都市になったが、京都は、公家と武家の勢力交代のあいだに、町衆が自立志向を強めて自治都市へ発展した。鎌倉と京都の禅宗のお寺（五山）には、僧侶が中国から来たり、こちらからも修行に行ったり、往き来があり、仏教文化以外の宋・元・明の文化も蓄積され、木版刷りの出版もはじまっていた。また戦国乱世を通じて多数の城下町や宗教都市、また堺、博多など商工業者の自治都市が形成され、自由な気風と教養を背景に、江戸時代（e.17thC～ m.19thC）には、富を手にした商人を中心に、歌舞伎や浄瑠璃、読み物や俳諧など、民衆の娯楽が盛んだった。近松門左衛門、井原西鶴、松尾芭蕉に代表される元録文化は17世紀後期から18世紀にかけてのことである。

早いという点では、宋末明初に記され、民衆に愛好された『三国志演義』や『水滸伝』など、中国の方が民衆文化の発達は早かったが、その多彩さ豊かさでは日本の方がまさっている。やがて文化の重心は京都、大坂から江戸へと移るが、いずれにせよ、世界でまれなほど早くから、多彩な民衆文化が展開していた。この点が、のちの都市大衆文化にも、日本的な特色を刻印することになる。以下、明治期および1910年代の前史、そして、1920年代の形成期と順を追って、その概要を見てゆきたい。

2. 前史 ── 19世紀半ばから1910年代

明治期の文明開化は、いわば上層部の改革で、庶民の生活は江戸時代とそれほどかわらなかった。それが大きく様がわりしてゆくのが、1904－05年の日露戦争の後、1920年代にかけてのことである。日清、日露戦争期の相つぐ増税によって、全国民の70%を占めていた農民のうち、小作農が70%くらいまで増加、農村に資本主義経済が浸透し、出稼ぎに頼る状態が慢性化した。そして、彼らの多くが都市に流れこみ、1920年には工場労働者の人口が小作農のそれをうわまわるようになる（第一回国勢調査）。産業構造が急速に転換し、軽工業は大工場化し、農村から若い女性労働力を呼び寄せ、酷使する方向へむかった。重化学工業の現場でも男性労働者の肉体が傷んだ。都市の工場地帯はふくれあがり、貧民層がスラム街を形成し、都市は歓楽と犯罪の渦まく場所として、憧れと恐れの対象となった。また東京ではセメント工場が灰を降らせ、東洋のマンチェスターの異名をとる大阪では紡績工場から出る煤煙が小学校の机の上にも降りつんだ。職場への機械の導入は、人びとの神経を痛めた。江戸時代に築かれた信用第一の商法も急速に崩れ、競争発展が世の原理になった。そして、商社マンやサービス産業に従事する人びとが新中間層（江戸時代の庄屋層、富豪の町人層を旧中間層と呼ぶ）を形づくってゆく。農村では資本主義の浸透に対して、換金作物の栽培など自衛策がとられ、また地縁共同体の再編が進んだ。

俸給生活者が都市とその近郊に移り住むにつれ、それまでの大家族が解体し、1930年には二世代以下の家族が優に50%を超える（第二回国勢調査）。また、1910年代に入ると満20歳男性で尋常小学校卒業程度の識字率をもつ人びとが85%に達する（陸軍壮丁調査）。エリートの卵と位置づけられた中学生や、とりわけ女学生が急増、識字率の量と質が飛躍的に高くなってゆく。彼らの多くは、短歌をつくることをたしなみ

のひとつとしていた。俳句は、より遊びに近く、人口はその約三倍におよぶ。江戸時代まで詩といえば、漢詩を意味し、明治期にヨーロッパの詩の影響をうけて、和歌、俳諧、漢詩を日本の詩とよぶようになったが、漢詩は日露戦争後に急速に廃れた。

1905年、日露戦争後の都市化の進行は、都会の景色まで一変させた。東京では、1917年ころ、江戸の風情を残す場所が消えてしまうと日本画家たちが嘆くほどだった。古都、京都でも道路が拡張され、市電が走るようになる。近代機械文明の進展が生む生命の危機に対する反発は、一方で、生命力の解放を求める主張を、他方で伝統の見直しの機運を育てた。とりわけ民衆のあいだでは、平和で太平楽な江戸の文化を懐かしむ感情が渦巻き、着物の柄にも江戸小紋が復活、アールヌーボーの植物模様と入り混じって流行した。こうした都市の変貌や、伝統の再評価の機運を背景にした芸術作品も多く生み出された。

内務省地方局は日清戦争を前後する時期から生じはじめた都市問題――いわゆるスラム街の形成――への対策に、日露戦争の戦費をまかなうために用いた外国債の返済に汲々とする国家財政はあてにできず、「日本古来の田園趣味」の継承をうたい、近江商人の出身地、滋賀県五個荘（ごかしょう）村、漁村の代表例には広島県賀茂郡坂村、農村の代表例には愛知県海東郡甚目寺（じもくじ）村などをあげ、節約と風光明媚な集落の見直しを訴えた。結核も蔓延し、医者たちも都会の空気や水質の汚染を指摘し、郊外への移住を奨めた。

こうして人びとの生存そのものが危機にさらされる事態が進行し、生命の危機感がひろがり、欧州大戦（第一次世界大戦）の予感と勃発は、魂の救済と地上の救済とを求める疼きをさらにかき立て、信仰の価値を訴えるさまざまな宗教運動が展開し、一種の宗教新時代を到来させた。また労働者や女性の解放を求める声のなかに、そして、詩の中にも、いのちの燃焼と救済を求める叫びが聞こえる。

他方、日露戦争後の知識人の心にすみついたのは倦怠だった。それを逃れようと狂おしいまでの生命の燃焼を求める衝動が渦まくとき、デカダンスが口を開く。よく知られた吉井勇の「かにかくに祇園はこひし寝るときも枕まくらの下を水のながるる」という短歌は、耽美頽唐、酒と情癡の世界を流麗な調子でうたうと評されてきたが、同じ歌集『酒ほがひ』（1910）には、次のような歌もある。「われと堕ちおのれと耽けり楽欲の巷を出でぬ子となりしかな」、「すてばちの身をたはれ女の前に投ぐわが世のすべて終りたるごと」。

祇園情緒をひたすらに流麗にうたいあげる裏には、色街を出られなくなるほど堕落した己れに対するどす黒い自嘲が、張り付いていたのである。これは大正期に、若い芸者に入れあげ、情痴に狂う中年男を多く主人公にした「私小説」が流行し、そこに、しばしばセルフ・パロディーが織り交ぜられていることの秘密を示してもいるだろう。

捨てばちにエロスの陶酔を求める傾向は、若い世代も感染した。木下杢太郎の詩「春朝」（1911）より。「雨の降る春の朝、／にがい酸つぱい生の味、／解脱もならぬ苦しさは、／どうせままよと、巻きかかるふてくされたる幻影の／かの波な　み頭がしら、ビアズレエ、ギュスタヴモロオ、我国は／鶴屋南北、喜多川の／痛ましくも美しきその妖艶の神のすむ／海の底へと祈願する」。

「にがい酸つぱい生の味」がする倦怠感。凡庸な身には、求めても解脱は訪れない。その苦しさから逃れようと、身を焼くような凄艶な美を求める。そのとき、ヨーロッパの世紀末絵画と江戸後期の民衆を魅了した凄艶な趣向が横並びにされる。イギリスのビアズリーは、日本の浮世絵版画に学んで大胆にデフォルメした線描でエロティシズムをふりまき、フランス象徴主義の巨匠、ギュスターヴ・モローはインドの神秘的宗教の雰囲気を取りこんだ絢爛たる油絵を描いた。四世鶴屋南北は凄惨な殺しや濡れ場、また観客の意表に出る奇想に満ちた歌舞伎をくりひろげた。歌麿は、後期の肉感的な浮世絵を想えばよい。そして、この「酸っぱい生の味」は、北原白秋の詩や谷崎潤一郎の小説など1910年代から20年代かけて花ひらいたエロティシズムとグロテスクの美の根方をよく語っている。

20世紀への転換期には、ノルウェーのイプセン、ドイツのハウプトマン、フランスのユイスマンスら「自然主義」に出発した劇作家や小説家が、自然の深みや生物の本能のもつ神秘――たとえば渡り鳥の驚くべき飛行距離など――にひかれ、象徴主義に転じていった。ヨーロッパで自然主義が衰退し、象徴主義が盛んになっていることは、ドイツの批評家、ヨハネス・フォルケルトが『美学上の時事問題』（Asthetisce Zeitfrangen, 1895）で「自然主義は終わった」といわれるが、自然の

「深秘なる内性の暴露に向かう『後自然主義』は、自然の神秘に向かう象徴主義と本質を同じくし」、また近代人の「神経質」な特質が「現実の感覚」より「空想的な感覚」を重んじる方向を盛んにしていると述べ、これを森鴎外が『審美新説』として翻訳紹介(『柵草子』1898～99年に連載、刊行1900)し、反響がひろがってゆく。象徴主義の詩人として出発した岩野泡鳴の『神秘的半獣主義』(1906)は、そのなかで、自らメーテルランクの「思想上の兄弟分」と称し、「自然主義」が深まると「神秘」に入らざるをえないと述べている。彼は『早稲田文学』をひきいる島村抱月とともに「新自然主義」を名のり、ともに、普遍的な「生命」の象徴表現を目指す芸術論を展開した。小説界でも「自然主義」は、性慾を暴き書くもののように思われ、1910年には失墜し、入れ替わるようにして、エロティシズムとグロテスクを特徴とするデカダンスの芸術が開花してゆく。

3. 1920年代――都市大衆文化の開幕

3-1　都市大衆文化へ

1918年に米騒動が全国各地で爆発、20年には普通選挙運動の高揚とならんで、アナルコ・サンディカリスト、大杉栄の息のかかった大ストライキが官営八幡製鉄所の溶鉱炉の火を4日間にわたって消した。21年には神戸のふたつの造船所で大争議が起きた。これにはキリスト教社会主義の賀川豊彦が活躍した。1910年の大逆事件ののち、官憲により社会主義が徹底的に抑え込まれていたため、男女労働者の生存権、生活権をかけた自然発生的なストライキは組合主義の色彩を強くもって高揚した。

1920年、日本がILOを傘下に抱える国際連盟の常任理事国となると国際協調路線をとり、労働組合運動や社会主義思想への弾圧を一定程度緩め、普通選挙の実施を決めた。また1919年に3・1朝鮮独立運動と5・4中国独立運動の高揚を受け、植民地統治を武断政治から文治政治に転換した。

労働者や小作農の生存権をかけた闘争に支えられた大正デモクラシーの波は、1923年9月1日の関東大震災をきっかけにして、急速に引いてゆく。その日のうちから、朝鮮人と社会主義者の暴動が起こるという流言飛語にあおられた自警団が約6,000人の朝鮮人、中国人を虐殺。不穏な動きを抑えこむため、内閣は翌２日より11月半ばまで、東京周辺に戒厳令を敷いた。その裏で、陸軍と警察は亀戸(かめいど)で10人の戦闘的労働者を、16日には無政府主義者、大杉栄・伊藤野枝夫妻を殺害していた。財界からは「大震災は、近年、贅沢(ぜいたく)と放縦(ほうしょう)に慣れ、危険思想に染まりつつある国民に対する天罰である」と「天譴論(てんけんろん)」が唱えられ、11月10日には「国民精神作興ニ関スル詔書」が質実剛健の国民精神を作興せよと呼びかけた。学生に対しては社会主義と風紀の取り締まりをはかる「思想善導」が開始される。

第１次大戦による好景気と、そのあとの不況の波、そして震災によって、世の無常を思い知らされた大衆の心には、やるせなく、わびしい思いが棲(す)みついた。北原白秋とともに童謡や民謡運動に活躍した野口雨情(うじょう)の「船頭小唄」がそれをよく映している。「おれは川原の枯れ薄／同じおまえも枯れ薄／どうせふたりは、この世では／花の咲かない枯れ薄」。

第一次世界大戦後の不況により、資本集中が進み、1923年秋の関東大震災によって東京の資本が打撃を受け、関西資本を本拠にする毎日新聞と朝日新聞が二大新聞になり、全国紙の様相を強めて、ともに「全国三百万読者」を呼号、一冊一円で大量の活字を盛り込んだ豪華な装丁の「円本」や大衆雑誌がブームを呼び、やがて1930年ころからラジオ受信機も普及してゆく。文字通りマス・メディアの時代にはいり、大量生産／大量宣伝／大量消費のサイクルがまわりはじめる。

新聞やラジオの報道、大量に出まわる廉価な商品の前では、どんな職業や身分の人も同じ消費者にすぎない。都会の盛り場では、道行く人はみな素性を知らない他人ばかり、群集の中の孤独感をみんなが味わうようになる。地方都市の中心街にもアールデコ風の街路灯が点り、盛り場には色とりどりのネオンサインが輝き、一時の歓楽を求める人びとが集まり、一見華やかな大衆文化が花ひらく。このような光景が「帝都復興」の掛け声がかかった東京だけでなく、とともに地方都市にもひろがっていった。

新たな消費文化のシンボルのひとつはモダン・ガールである。タイピストや電話交換手、デパートの売り子、カフェのウェイトレスなど、働く女性たちが都会を彩(いろど)った。断髪(ショート・カット)に短い袖とスカート丈の洋服で街を闊歩し、都会で一人暮らしし、スポーツを好むモダン・ガールたちは人目を引いた。肌を露わにし、活発に動きまわるのは男のすることとい

う決まりを侵(おか)し、古い「女らしさ」を捨ててエロティシズムを振りまいたからである。「男おんな」と陰口をたたかれ、そうでなければ、「野性的で、かつ技巧的な」魅力が語られた。和服の柄にも、襟元にも、モダンなデザインが配されるようになっていった。

3-2 「大衆文学」の勃興

都市大衆文化の開幕をつげるもうひとつのシンボルは、「大衆文学」を名乗る文学運動の勃興である。1926年に、時代小説作家として注目を集めていた白井喬二が同人雑誌『大衆文芸』を創刊すると、毎日新聞社の週刊誌『サンデー毎日』が「大衆小説」を懸賞募集(木村毅が選考)するなど、その波はまたたくまにひろがり、そして1927年に平凡社が一冊一円で大量の活字を詰め込んだ「円本」の『現代大衆文学全集』を売り出し、あっという間に「大衆文学」ということばが、ジャーナリズムにあふれるようになった。白井喬二による「大衆文芸」の命名は、1917年のロシア革命に学んで、国家社会主義に傾斜し、大衆社を組織した高畠素之の雑誌『大衆運動』などにヒントをえたものだったが、「大衆文学」の勃興は、それまでは大勢の僧侶を意味する仏教用語として用いられていた「大衆」という語を“mass”の訳語として定着させた。

そのとき、提唱された「大衆文学」とは、文学青年を読者対象に絞った文壇小説に対して、勤労大衆に慰安と思想を提供するためのものであり、その布陣は「時代小説」と新たに若い読書人たちをつかみつつあった「探偵小説」だった。その背景としては、ロマン・ロランやエレン・ケイらによって勤労者の労働力再生産のための娯楽の必要性に発する「民衆芸術」運動が、大正期に論議の的となり、また実践に移されていたこと、浪曲の台頭によって講釈の場を失いつつあった講談が、夕刊紙などに進出し、講談速記が読み物としてむしろ盛んになり、また少年向けに創作ものを手掛ける「立川文庫」がヒットしていたこと、作家が創作講談の筆をとりはじめたことなどがあげられる。幕末の変革期に舞台を求め、架空の主人公を活躍させる長編のフィクション、中里介山『大菩薩峠』(1913〜)が新聞連載され、しだいに人気を博していたし、他方、コナン・ドイルのシャーロック・ホームズものにヒントを得た岡本綺堂の「半七捕物帳」シリーズ(1916〜)も好評を得ていた。ただし、この2人の作家は「大衆文学」運動とは距離をとっていた。

白井喬二は、「大衆文芸」運動をおこすにあたって、1920年代に犯罪トリックを中心にした探偵小説作家としてデビューし、人気を集めはじめ江戸川乱歩を誘い、乱歩がこれに応じたため、運動は「時代小説」と「探偵小説」のふたつのジャンルを核として推進された。その理由には、舞台を江戸時代にとり、謎ときと探偵役の冒険からなる「捕物帳」という両ジャンルにまたがるような小説形式があったことも一役買っている。

3-3 エロ・グロの大衆化とナンセンス

江戸川乱歩の探偵小説「赤い部屋」(1925)の主人公は、法律にふれない完全犯罪の方法を次つぎに考え、実行に移す人物だが、その動機を、こう述べている。「私という人間は、もう人生が退屈で退屈でしかたがなかったのです」。大正期の知識青年たちをとらえたエロティシズムとグロテスク、デカダンスの美学は震災後、大衆の心にも取りついた。倦怠に根ざした好奇心は、強い刺戟を求めてやまない。官能の陶酔を求めて、エロスの叛乱は大衆雑誌の中にひろがった。奇矯なことを追い求める「猟奇」という語が雑誌や新聞に踊り、性犯罪が好んで取りあげられてゆく。エロ・グロの流行である。

他方、バカバカしい無意味さ、ナンセンスも流行した。最初はユーモアとペーソスといわれ、表面は滑稽でも、ほろ苦さが残る読み味が好まれたが、しだいに捨てばちな、あるいは一瞬でも、この世の憂さを忘れさせ、また世界のすべてを笑い飛ばすようなものが流行した。チャップリンやバスター・キートンのドタバタ喜劇が受け、時代小説にも、娯楽時代劇映画にもモダン・ダンスのステップとともに取り入れられた。欧米の雑誌からパーティー・ジョークが翻訳され、新聞にも軽い笑話があふれる。

1910年代から絵画、詩、そして小説に、象徴主義から表現主義などのアーリイ・モダニズムへの流れから刺戟を受けた作風が少しずつ現われていたが、1920年代に入り、日本のモダニズム詩は、1920年代に国際都市、大連で安西冬衛、北川冬彦らによって口火が切られた。そして、とりわけ関東大震災後、村山知義がドイツから帰国すると、ダダ、シュルレアリスムなど第一次大戦以降のヨーロッパの新しい表現に刺戟を受けたモダニズム芸術運動が本格化する。ひとことでい

えば、印象や感覚の断片を、新たな形式に組み立てる方法である。

1920年代のもうひとつの特徴は、非合法の日本共産党に指導された「プロレタリア文化運動」とそれに同調する言論がさかんになったことである。科学的社会主義を名のるマルクス主義は、社会主義に向かう歴史の必然性が、1917年のロシア革命によって証明されたと喧伝した。知識階級が没落するのは「宿命」という考えがひろがった。だが、歴史の必然性を認識すれば、知識階級も社会主義運動に合流することができるという考えが、これを覆した。日本では福本和夫が知識人をまじえた強力な党をつくり、労働者を階級意識に目覚めさせることが必要と訴えて、一時期、共産党の実権を握り、リーダーの大杉栄を官憲に殺害されて失ったアナーキストとの闘争を強めて党勢を拡大した。

だが、国際共産主義運動の司令部、コミンテルンが1927年に発表した日本革命運動の指針では、これを、労働運動を分裂させるものと批判し、君主制の廃止など民主主義革命と、また中国など民族独立運動を支援する方針を掲げた。官憲は、活動家を大量に検挙し、徹底的に封じこめる作戦に出た。知識層は、合法活動に活路を求め、社会主義の実現を目指す言論が一時期、ジャーナリズムを席捲するほどの勢いをもった。プロレタリア芸術運動も多彩に展開した。

1900年を前後する時期、印象主義から象徴主義への傾斜を深めた芸術の流れは、松尾芭蕉の俳諧を日本の象徴詩とし、俳諧の持ち味である滑稽味を抜いて、その真髄として「さび」を指摘し、それを宇宙と一体となる境地を示すものと論じるようになっていった。近代短歌の巨星、斎藤茂吉が「実相に観入して自然・自己一体の生を写す、これが短歌における写生である」(1921)と断言し、都会で神経を痛めた青年が田園の暮らしのなかで神経衰弱でなくては感じられない美を味わう小説『田園の憂鬱』(1918)を書いて、文学青年たちの心をとらえた作家、佐藤春夫は、評論「『風流』論」(1924)で、芭蕉の芸術は「全く宇宙と一体となってしまったような心身合一の深い感興、その一刹那の感覚」を表現したものと説き、それを手本に、フランスのバルザックに代表される「人間意志の紛糾を極めた葛藤を凝視し、それを組み立てたところに意味のある近代小説」から抜け出たいと述べている。そして、詩人、萩原朔太郎が1926年、「象徴の本質」などのエッセイで、ヨーロッパの前衛詩人たちが日本の俳句をヒントにしていることをつかみ、世界に冠たる日本の象徴文芸を訴えるに至る。

このような動きのなかで、たとえば、小動物たちの死を自身の生死に重ねて随筆のような形式で書いた志賀直哉「城崎にて」(1917)などが、東洋的な「生死一如」の境地を書いた「心境小説」として認められてゆく。これはフランスの散文詩風のコントなどと混じりあい、日本に独自な「私小説」と呼ばれることになる。

4. 1930年代――歴史の転換点

1929年、アメリカが生産過剰から経済危機に陥り、ソ連を除く国際経済が大恐慌に見まわれ、日本もその波にのまれ、1930年から31年にかけて未曾有の経済危機に入る(昭和恐慌)。これが歴史の転換点を準備した。それまで社会主義革命を目指す論調が強かった日本共産党は、1932年、コミンテルンの指令で、天皇制打倒、民主主義革命の実現を掲げた。官憲はこれを徹底的に弾圧し、突然の方針転換に動揺した指導層が雪崩を打って転向し、日本共産党はほぼ崩壊した。

1932年には、5・15事件が起こる。別働隊を指揮した橘孝三郎は、農村の困窮はマルクスが説くように社会機構の問題だが、マルクス主義が労働者を主体とするのに対して、アジアは農村を土台とする東洋文明を復権すべしと訴えている(『日本愛国革新本義』1932)。アジア主義に立つ農本主義革命の企てだった。そこには、インドの詩人で独立運動の闘士、1913年に東洋人ではじめてノーベル文学賞を受けたタゴール『サーダナ――生の実現』(1913)が冒頭で説く「自然の浩大な生命に包まれ、大自然にはぐくまれた」精神が引かれてもいる。タゴールは、日本でたいへん人気が高く、根源的な生命に根ざす思想をうたう『生の実現』は、くりかえし翻訳されていた。

1935年に国体明徴運動が国会へ持ち込まれ、それまで公認されていた天皇機関説――国家そのものに主権があり、天皇は頭部の役割を果たすという理論――が否定され、天皇主権説が認められた。「日本精神」を謳歌する思潮の高まりに対して、リベラリストやマルクス主義経済学者が公然と批判する姿勢がジャーナリズムに見られるのも、この年までのことである。

1930年には、帝国大学憲法学教授、筧克彦が、天皇は「宇宙大生命の表れ」であり、儒教や仏教、キリスト教をも同化する普遍的な力をもつという考えを一般向けに書いた『皇国精神講話』や、のち、国民精神文化研究所の理論家として活躍する哲学者、紀平正美（きひらただよし）がドイツ観念論哲学を換骨奪胎して、日本文化の特殊性を「ことあげ」（言揚、言挙。言葉で論じること）しないことや「惟神（かんながら）の道」――神があるがままの道――に求める『日本精神』、1935年には、「神ながらの道」を「至誠」「神人合一」、「公明正大」や「清明心」などと同じ意味で、儒学や道家思想、陽明学、大乗仏教やドイツ哲学とも共通する考えであり、天地自然に従うこと、普遍的な精神と説き、「今後は日本民族が『神ながらの道』に拠（よ）って自主的に積極的に東西洋文化を融合調和することに努力しなければならぬ」と説く哲学界の大御所、井上哲次郎の『日本精神の本質』が出されるなど、神がかった国体論が唱えられてゆく。

このうち、筧克彦のものは、皇道派の青年将校たちの精神的な支柱となった。彼らは、1936年、2・26事件を起こす。この４日間にわたるクーデターに対する非難の高まりを逆用し、軍全体で国家改造を実現する方針を固めた「新統制派」が軍部を掌握し、内閣にも食いこんでゆく。民間ファシズム運動も統括し、財界首脳とも連携し、皇道派の思想も取り込み、総力戦にむけた機運をつくってゆく。

そして、1937年７月、日中戦争の本格化により、世相は一挙に戦争気分に染まる。それでもナンセンスに現を抜かす、大衆の気分を、いかに戦争に向けるかが体制側の課題であり、９月には国民精神総動員運動を開始し、ダンス・ホールなどは閉鎖され、モダン都市の風俗は下火になっていった。「革新」官僚たちは、国内矛盾を抑える社会主義的な政策を次つぎに実施し、それに反ファッショを唱える社会民主主義の勢力も、飲み込まれていった。

1937年12月、日本軍が南京大虐殺を起こし、国際世論は一挙に反日に傾き、日本は孤立、日中戦争は泥沼化する。

同じ12月と翌年１月に、人民戦線事件が起こる。官憲は、それまで反ファッショ運動をリードしてきた山川均が率いる労農派の労働運動家や学者を大量に検挙し、戦争反対の意志を強権的に抑えこんだ。

近衛文麿内閣は1938年11月に、日中戦争の戦略を「防共」から日華満の連携による「東亜新秩序」建設へと転換し、中国国民党ナンバー・ツーの汪精衛に働きかけ、やがて南京政府を樹立させるようにはかってゆく。「満洲国」のスローガンだった「民族協和」をアジア全域にひろげたもので、今日でいう多文化主義を標榜するものだった。そして、これが、日独伊三国同盟の締結、日ソ中立条約の締結、そしてヨーロッパにおける第２次世界大戦の勃発、日本軍の仏印進駐など国際情勢の変化を経て、1941年6月に第二次近衛文麿内閣によって「大東亜共栄圏」構想として発表されることになる。

1941年12月8日、対米英戦争の開戦は、中国侵略に心を痛めていた人びとにも、西洋近代、すなわち帝国主義を超克し、アジアを世界史に登場させるものという意義を受け止めさせ、それまでのアジア民族の解放のスローガンに一挙に現実味が与えられた。ところが、対米英戦争の開戦の詔勅に「大東亜共栄圏」の文字は現れない。第２次近衛文麿内閣が唱えていた国是は、軍服を着たまま内閣総理大臣の椅子に座った東條英機に引き継がれなかったと考えてよい。日本軍が占領下においた東南アジア各地でやがての独立を約束するが、軍部の行動は、米英による国民党軍支援物資の補給路を断つことに邁進するだけで、各民族の独立運動を援助する姿勢を見せた形跡は見あたらない。1943年11月初旬、日本政府は大東亜会議を招集し、大東亜共同宣言を発するが、すでに太平洋における制空権、制海権はアメリカに握られていた。

なお、日本のモダニズム詩は、1933年に傀儡政権を立てて建国した「満洲国」や台湾、上海、朝鮮半島でも展開した。日本の「内地」から、各地に赴いた詩人たちは、それらの都市に異国情緒を求め、また「民族協和」や「大東亜共栄圏」のユートピアを夢見る詩として展開した。

松尾芭蕉の俳諧を日本の象徴詩と論じた伝統の再解釈の流れは、能楽などへも範囲をひろげ、禅林の生活からひろがった中世の美意識全般におよび、1935年ころ、アカデミズムの美学、文芸学は「わび・さび」や「幽玄」こそ、「日本的なるもの」の核心と論じるようになっていった。ヨーロッパの象徴主義を受け取ってつくられてきた日本の芸術上の伝統主義の流れに対して、小林秀雄ら日本のリベラリストたちは、近代化すなわち欧化、実証主義や科学精神の普及という戦略を

とって対峙しようとしたため、有効な反撃を行うことができないままに、対米英戦争の勃発を前後して、大勢は伝統主義の大波に巻き込まれていった。

第二次世界大戦に敗北した日本では、体制・反体制を問わず、アメリカ文明へのキャッチ・アップが大勢を占め、米ソの冷戦体制のもとで、日本はアメリカの核の傘の下にはいることにより、高度経済成長を遂げ、テレビジョンの普及や東京オリンピックの開催、明治100年祭など現代化の道をひた走るが、そこには1920年代の大衆文化の「復活」現象がさまざまに見られ、また、茶道、華道などに「わび・さび」や「幽玄」などを日本文化の独自性として打ち出す動きも大衆化する。これを大衆文化の第２期とすれば、1980年代に本格化する情報化社会化、グローバリゼーションとローカリゼーションが複雑にからみあったグローカリゼーションの進行する今日までを第３期と規定することができるだろう。

この第２期には、1930年代の近代化すなわち欧化路線が再評価されるかたちになった。それゆえ、文化全般については、日本共産党が引き続いて用いた戦前の日本すなわち「(半)封建制」規定に縛られ、現代都市化、大衆社会化現象の解明が大幅に遅れた。文学史においては、明治後期の分析にどちらに肩入れするにせよ、「自然主義－対－ロマン主義」の図式が幅を利かせることになり、20世紀における象徴主義からモダニズム諸潮流への展開過程が長く解明されずにきたのである。

日本近現代文化史、文学史の全面的な再編成は、1980年代からさまざまに盛んになっているが、2010年代にようやく決着がつこうとしている[1]。

1　簡便な書物としては、鈴木貞美『入門　日本近現代文芸史』(平凡社新書、2013)、本格的な学術書としては『近代の超克――その戦前・戦中・戦後』(作品社、2015)を参照されたい。